



TITLE:

<コメント>マレーシアにおける社会統合の3類型と外国人移民

AUTHOR(S):

山本, 博之

CITATION:

山本, 博之. <コメント>マレーシアにおける社会統合の3類型と外国人移民. CIRAS discussion paper No.93: 多民族社会マレーシアにおける移民と社会統合 2020, 93: 23-26

ISSUE DATE:

2020-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_93_23

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

マレーシアにおける社会統合の3類型と外国人移民

山本 博之 京都大学

移民がマレーシア社会で今後どのような影響を持ち得るのかについてみなさんと一緒に考えるにあたってどのような枠組みがあるのかを整理したいと思います。

マレーシアの3つの統合モデル

マレーシア研究では当然の前提ですが、マレーシア社会の大きな特徴は多民族社会であるということです。ただし、多民族社会といってもいろいろな出自の人が暮らしているという意味での多民族社会ではありません。いくつかの特徴があります。まず、民族の区別が明確に規定されています。そして、政治・経済を含む社会生活のほとんどの部分で民族性が関わります。さらに、民族ごとに異なる権利を認めています。優遇されている民族とそうではない民族があることが公式に認められています。いろいろな出自の多様な文化背景を持つ人びとがいるという意味での多民族社会ではなく、明確に線引きされた民族で国民を区切って、それぞれが持つ資格・権利が違うことが公式に認められているのがマレーシアの多民族社会の特徴です。

そのため、ここでいう民族を、日常会話で使う言葉としての民族、つまり文化集団としての民族として捉えてしまうと、マレーシアの話をする場合には議論が食い違ってしまいます。混乱するのでマレーシアの民族を「民族」と呼びにくいところもあるのですが、ここでは「民族」と呼ぶことにします。これに対して、文化的な意味での民族について言及する必要がある場合は、民族と区別するため、この場では「エスニック集団」と呼ぶかもしれません。

マレーシアの多民族性について当事者であるマレーシア国民がどう思っているかは、人びとの心の中を知ることではできませんが、社会のまとまりが取れない

ので困難のもとだと感じている人もいることだろうと思います。仮にそのような人が一定数いたとしても、多様な出自を持つ人びとが深刻な対立や紛争を起さずに社会が発展する実績を積んできたという意味では、マレーシアの例は人類史上における大いなる試みとして積極的に評価されるべきだと私は思います。

このようなマレーシアの多民族社会の統合モデルがどのようにして形成され、どのような特徴を持っているのかというのが、マレーシア研究の主要なテーマの1つであり続けてきました。これに加えて現在では、独立から60年以上、マレーシア結成から数えても50年以上が経ってもその統合モデルは有効なのか、それとももう有効期限が切れていて新しい段階に入ろうとしていて、これまでの民族を単位としたものとは異なる統合モデルが必要とされているのかを考えることも主要なテーマの1つです。その際に外国人移民に着目しようというのが本日のパネルで取られている方法です。

マレーシアの社会統合について振り返ってみます。現在はマレーシアの国民である華人やインド人も、かつては外国からの移民でした。外国人移民が民族という枠を通じて国民になっていきました。これがマレーシアの歴史です。そう考えると、現在の外国人移民もかつての華人やインド人と同じような道を辿って、いずれマレーシア社会に統合されていくのでしょうか。それとも、華人やインド人とは違う道を辿るのでしょうか。華人やインド人と同じ道を辿ることがないとしたら、それは何が違うためでしょうか。これらと同じ問いの裏表にある疑問ですが、外国人移民が多数入ってくることで、これまでマレーシアが作ってきたマレーシア型の統合モデルは変容していくのでしょうか。こういった疑問について考えたいという関心が本日のパネルの前提にあります。

このことについて議論するために、民族ごとにまとまって全体で1つの社会を作るという仕組みがどの

ように作られてきたのかを、いくつかのモデルに単純化して簡単にまとめておきたいと思います。はじめに、マレーシアをいくつに分けて捉えるかについて確認しておきましょう。これまでマレーシア研究では、もっぱら半島部マレーシアだけを対象にして、マレー人、華人、インド人の3民族という捉え方がされてきました。それに対して、ボルネオ島のサバとサラワクについては、文化的に見るとマレー人も華人も、そして少数ながらインド人もいるので、半島部の3民族の考え方をサバとサラワクにも当てはめようとする考え方もあると思いますが、それは最初に申し上げた民族とエスニック集団の違いを混同した考え方で、少なくとも政治や経済を考える上では有効ではありません。今日の細田さんの発表でも触れられていたように、サバとサラワクは政治経済の面で半島部と同じではなく、サバとサラワクがそれぞれ社会を作っているように見えます。そのため、マレーシア社会をいくつかのブロックに分けて考えるのであれば、それを民族と呼ぶかどうかには議論があるでしょうが、マレー人、華人、インド人、サバ、サラワクの5つに分けるのが適切です。以下の議論ではそのことを念頭に置いています。ただし、時間の都合で5つのブロックすべてを扱うことはできないので、便宜上、華人とインド人をまとめて、サバとサラワクをまとめて、マレー人、華人とインド人、サバとサラワクの3つのブロックについて考えることにします。

まずマレー人に関しては、今日の西さんの発表にもありましたが、アチェ人、プギス人、ミナンカバウ人、ジャワ人など、いろいろなエスニック集団がいましたが、マレー語とイスラム教を共有することで、半島部の土着住民としてのマレー人に取り込まれていきました。個別に取り込まれていく過程に目を向けると、地元の多数派集団がいて、その周縁部にいる文化的に多数派と共通性が高い人びとがしだいに多数派に同化していくという統合パターンです。これについては、細かい説明は省きますが、「プラナカン型」と呼ぶことができます。

華人やインド人は、地元の多数派の周縁部にいる存在ですが、多数派とは異なる文明を背負っています。その文明の起源は地元ではなくその外にあります。華人であれば中国にあり、インド人であれば南アジアにあります。国外に起源をもつ文明を担っているとい

う意味で地元の多数派と異なる人びとであるとみなされ、地元の多数派に同化するのではなく、華人もインド人もそれぞれ独自の民族として文化的独自性が認められます。ただしその一方で土着住民ではないとされて政治経済的な権利は制限されます。こうして多数派住民とは異なる民族となることで社会の一員になるという統合パターンで、これについては「バンサ型」と呼ぶことができます。

サバとサラワクはそれぞれ文化的には多様な人びとからなります。サバだけ見ても、多数派のカダザンドゥスン人やムルト人などの先住諸族もいれば、沿岸部にはバジャウ人やスルック人などのムスリム諸族もいるし、華人もいます。しかし半島部と違ってこれらのエスニック集団の境界は明確ではなく、互いの通婚も多く、混血者もめずらしくありません。兄弟姉妹で民族や宗教が異なることも珍しくありません。たとえば父親がインド人、母親がカダザン人で、子どもが4人いる家庭で、息子2人は父親の生活習慣を受け継いでインド人として育ち、まわりからインド人とみなされるし自分もインド人だと思っているけれど、娘2人は母親の生活習慣を受け継いでカダザン人として育ち、まわりからカダザン人とみなされているし自分でもカダザン人だと思っているという家族も普通に見られます。

このようにエスニック集団の境界が明確でないことがサバ社会の特徴です。細田さんのフィリピン人の発表にもあったように、たとえ出自が域外にある人でも、その社会の正規の滞在者で、社会になんらかのかたちで貢献する限りは社会の一員として受け入れるという態度がサバにあります。こうした社会のあり方を、サバに関しては「アナック・サバ」や「バンサ・サバ」という言い方がありました。ただしこれらの表現には「サバ」が入っているためにサラワクのことを言うときには使えないので、ここではサバのような統合のパターンを「オランキタ型」と呼ぶことにします。

このように、マレーシアの社会統合のパターンを図式化すると、「①プラナカン型」——多数派に包摂されたり排除されたりを繰り返しながらゆるやかに同化していくパターンと、「②バンサ型」——多数派と違う独自の民族であると認められることで統合されるパターン、そして「③オランキタ型」——エスニック集団の違いに民族の違いという意味を持たせずに

1つの社会になるという3つに分類できます。これらの統合モデルが外国人移民を受け入れていくことでどのようにしていくのかというのが今日のパネルの課題です。

3つの報告について

マレーシア研究における統合の考え方はこのくらいにして、ここからは今日の3人のご発表について見ていきたいと思います。まずは3人のご発表に共通する点として、いずれも政治経済、宗教、文化の3つの観点からのご発表だったとまとめられると思います。政治経済については、外国籍で政治参加は限定的なので経済が中心です。宗教は、具体的には冠婚葬祭をどのように行うのかという話です。文化は、ここでは子どもへの教育にとくに目が向けられていました。

3人のご発表に共通して興味深いもう1つのことは、マレーシアから見るとインドネシア人、フィリピン人、ミャンマー人というように国ごとに見がちですが、送り出し国の立場から見ると、それぞれ国内に民族や地域や立場が多様な人びとで、それによってマレーシアに来る経路や滞在中の暮らし方やその後の生き方が異なることがあるということでした。マレーシア研究ではインドネシア人やフィリピン人やミャンマー人の多様性にあまり目が向けられてきませんでしたが、それぞれの地域の研究者に協力していただく共同研究の形をとることで個別の事例を具体的に明らかにすることができると感じられました。

続いて、それぞれのご発表に対して、質問の形を取らないかもしれませんが、考えたことをお話することで議論の糸口の1つとしていただければと思います。

インドネシア人移民

インドネシアの事例は、かつては半島部のマレー人社会でエスニック集団ごとにマレー人に同化していくことで国民化していたということで、「プラナカン型」の統合パターンだと言えると思います。独立後になるとインドネシア人として入ってくるため、マレー

人に同化されず、外国人のインドネシア人として位置付けられていき、初めはアシン、つまり異質な存在だったものからハラム、つまり違法になっていくという話でした。さらに、労働の機会を奪う者あるいは犯罪の温床であるというところから、イスラム教の過激主義の思想を持っている者へとといった扱いもされていったという話でした。

マレーシアの当局がインドネシア人に強い態度で対応していくことで緊張感が高まり、それに対して社会は虐待者の通報や懲罰などをして保護する方向であるということで、社会と当局とを対置しているような議論がされていました。確かにそういった側面もあると思いますが、マレーシア国内のことを考えると、社会の側は、法による秩序を維持・回復したくて、そのため法による秩序を守ろうとしない人びとにどのように対応するかが課題になっており、そこに外国人労働者が使われているという面もあるのかもしれないと思いました。

それから、サバでは「オランキタ型」の統合にインドネシア人がうまく入っていくようなところがあって、学校もうまく使われていて、そのやり方をモデルにして半島部にも持ち込まれるのだろうかという話がありました。仮に半島部でサバの方法に倣ってインドネシア人が社会に溶け込んでいくことができたとして、その結果インドネシア人がマレー人に包摂されていくのかなと考えると、それはちょっと疑わしいかなという気がします。インドネシア人の存在は、うまくマレー人に統合されていくというよりは、マレー人というバンサのあり方への挑戦として受け止められるかもしれません。そのときに鍵となるのは宗教かもしれないと感じました。

フィリピン人移民

フィリピンの事例では、サバではフィリピン人は特定の民族やエスニック集団に位置付けられるのではなく、フィリピン人という独自の集団のままサバ社会に位置付けられるということなので、サバ社会の「オランキタ型」という統合モデルの話になっています。

その上でお尋ねしたいのは、フィリピン人がマレーシア国民とどのような関係を持つのかということで

す。先ほど申し上げた政治経済と宗教と文化の3つの観点のうち政治経済に関連して、国民ではないので政治面での権利はあまり考えられないでしょうから経済面ということになりますが、サバのフィリピン人がビジネスの許認可などを得ようとしたときにマレーシア国民と何らかの関係を持つことになるのでしょうか。それとも、永住者の地位を得たらビジネスの許認可なども自分だけで処理できて、マレーシア国民ととくに関係を結ぶ必要なく生きていけるのでしょうか。フィリピン人とマレーシア国民がどのような関係をつなぐのかということに関連して教えていただければと思います。

今日のご報告をうかがった印象では、永住者になったフィリピン人がいれば用が済むためにマレーシア国民ととくに関係を持つことなく暮らしていけるということなのかなという印象を受けました。そのようなフィリピン人の存在が増えることは、サバ社会が「オランキタ型」の特徴を強めていくことを後押しする方向で働くように感じました。

それから、興味深かったこととして、細田さんは不可視化戦略という言い方をしていましたが、自分たちがフィリピン人であることを表に出さない戦略をとっていることがありました。そのような戦略をとらなければならないということから逆に考えると、マレーシア社会は滞在資格や民族といった帰属や資格がとても重要な社会であることが改めて強く感じられました。そうだからこそ不可視化戦略をとるということだと思って、とても興味深くうかがいました。

ミャンマー人移民

ミャンマーの事例は、もともと永住志向ではないし、最近ではマレーシアへのミャンマー国民の流入数が減っているということもありましたが、定着あるいは統合のパターンとしては、ミャンマー人移民は「バンサ型」にあたるように思います。ただし、ミャンマー人という独自の民族としてマレーシア社会に認知を求めるということではなく、すでに存在している民族である華人に結び付いて、華人と接合することで既存の民族ごとの統合のモデルに自分たちを位置付けようとするということだと思いました。

そのため、今後ミャンマー人移民が増えるかどうかはわかりませんが、マレーシアでミャンマー人移民がプレゼンスを増していくとしたら、民族どうしの結び付きという「バンサ型」の統合モデルが強まる可能性があるように思いました。

水野さんのご発表は都市部を中心にミャンマー人のプレゼンスが大きくなっているという話で、プレゼンスがどれだけの大きさで定着するのかについてはまだわからない部分があります。たとえば教育については、第三国移住を目的にしているので英語で行われているということ、マレーシアの国語であるマレー語で教育を行っているわけではないということでした。それから、葬送協会があるというのは興味深いと思いました。定住の度合いと関連して、ミャンマー人移民の遺体はミャンマー本国に送るのでしょうか、それともマレーシアで埋葬するのでしょうか。

それから、話を聞き漏らしたかもしれませんが、ミャンマー人のイスラム教徒の移民がネットワークのなかで重要な役割を担っているという話でしたので、イスラム教徒の移民に関する役割についてももう少し教えてください。最近関心が向けられるようになったロヒンギャはイスラム教徒で、彼らがミャンマー国民であるかどうかはともかく、マレーシアではミャンマーのほうから来る人たちとして1つの社会的関心事になっています。今日のご発表ではミャンマー人が仏教徒であるからこそ華人という民族のなかにうまく入れるという話だったと思います。そこにミャンマー人のイスラム教徒がどのような役割を担い得るのかについて教えていただければと思います。